万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集
―付、万葉文化館蔵万葉集および万葉集関連書籍―

乾　善彦

一　はじめに

近年、冷泉家時雨亭文庫の公開や廣瀬本万葉集の発見によって、万葉集の諸本研究、伝本研究が盛んになりつつある。近年の諸本研究の特徴は、単に万葉集の本文制定のためではなく、テキスト自体を、それが成立した場に置いて、それ自身のテキスト価値を問題とする点である。二〇一六、二〇一七年度万葉文化館共同研究「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集」は、そのようなテキスト研究の流れをうけて、万葉文化館蔵嫁入り本万葉集を中心に取り上げ、万葉集を写した人、よんだ人、あるいは必要とした人など、人および人の営みに焦点をあて、万葉集を文化活動の一環としてとらえようとしたものである。もちろん、従来の万葉集研究も、万葉集を題材とした一つの文化現象であることにかわりない。それらも人の営為としてとらえることができよう。ただし、それらは『万葉集』という歌集（作品）を中心とした、あるいは万葉集に向かった人々との関わりである。それに加えて、われわれは「万葉集」という書物（テキストとしての万葉集）を対象とするものである。

万葉文化館には、嫁入り本以外にも多くの貴重な資料が蔵されている。あわせて万葉集関連書の調査を通じて、それぞれの時代に、どのような人々がどのような万葉集をよみ、どのように受け継いでいったのか、そこに生きた人とテキストとの関係に焦点を当てて、「万葉集」という「文化」に携わった人々と、その人々がよんだテキストとを多角的に考えようとした。以下、具体的に、本研究の意図したところを述べ、これからの研究課題の一つとして提示するとともに、万葉文化館蔵の資料群の紹介をおこない、本研究の成果を記録しておくことにする。

二　共同研究の概要

本研究で扱ったテーマは、大きく次の三点である。

①平仮名訓本万葉集の全体把握

②万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集

③万葉集の流転と継承

①では、万葉文化館蔵嫁入り本万葉集の類本を集めることで、従来、存在を知られながらも万葉集本文として重視されてこなかった

平仮名傍訓本について、その伝本上の位置付けを試みた。平仮名傍訓本は、万葉文化館をはじめ名古屋蓬左文庫、国文学研究資料館、関西大学（二本）、新潟大学、獨協大学など各所に存在が確認された。おそらく、その他にも多くの伝本が存すると思われる。万葉文化館蔵本は、紺地金泥の豪華な表紙と鳥の子の料紙とが特徴であるが、これと同様の装幀は、国文学研究資料館本、関西大学一本、獨協大学本にみられる。関西大学のもう一本と名古屋蓬左文庫蔵本は、綾地表紙。いずれも豪華な装幀であり、調度品としての価値もみとめられる。近世初期にこのような本を生産する工房のようなものがあったかと思われるが、また、それを支えるだけの需要もあったことと想像される。「嫁入り本」の名の通り、どちらかというと本文よりも調度品としての需要があったと思しい。ただし、関西大学の綾地表紙本は、版本の写しではなく、伝本の上からも注意されるという（田中氏談）。平仮名傍訓本の総合的な研究として、本集、田中論文に詳しく報告されている。

②については、万葉集そのもののテキスト以外に、万葉集がよまれてきたものをとりあげて、万葉集伝来のありかたを考えた。大きく三つのアプローチがある。

a．平安鎌倉時代の仮名書き万葉集

源順の古点以降、仙覚の新点にいたるまで、平安鎌倉時代には多くの歌人によって、万葉集歌が仮名で記されている。たとえば、古今和歌六帖に含まれる万葉集歌や、拾遺集にとられた万葉集歌など、だれがよんだか、あるいはだれが伝えたか、不明な点が多いが、おそらく、とある歌人によってそこにおさめられている。以前にもなかったわけではないが、近年、平安・鎌倉期の歌書類に収められる万葉歌と万葉集との関係が詳細に議論されるようになった。つまり、伝承ではなく万葉集テキストによって万葉歌が選ばれている場合のあることを指摘し、どのような万葉集によるかが議論されるようになってきた。三十六人集の人麻呂集、赤人集、家持集についても、万葉集テキストとの関係が検討されている。それらを総合して、伝本研究とは異なる視点で、平安鎌倉時代の万葉集享受のあり方を探ることも、本研究の課題であった。具体的には、池原による古今六帖の万葉歌、樋口による夫木和歌抄の万葉歌、新沢の三十六人集の万葉歌についての報告があった（参照、池原陽斉『萬葉集訓読の資料と方法』（二〇一六、笠間書院）、新沢典子「本文批評における仮名万葉の価値」、樋口百合子「中世名所歌集所収万葉歌の価値」（以上、小川靖彦編『萬葉写本学入門　上代文学研究法セミナー』（二〇一六、笠間書院））。

b．注釈書

注釈書も、研究書としてではなく、享受の一環としてとらえることができる。古く冷泉時雨亭文庫蔵万葉集抄（万葉集叢書にその写しである図書寮本がおさめられる）はやはり歌人の手になる、歌作

のためのものであった。仙覚の本格的な注釈は、数度にわたるテキストの校合作業から生まれたものであり、校合の目的が歌作のためであったとしても、やはり、万葉集の解釈のためととらえる必要があろう。その点で、契沖の注釈作業と重なるところがある（拙稿「万葉集のテキストと注釈―仙覚と契沖の場合―」（日本文学研究ジャーナル第五号、二〇一八・三）。しかしながら、それらと並行してものされた宗祇や季吟の注釈は、やはり、歌ことばへの関心、つまり歌作あるいは連歌のためのものであっただろう。万葉集をよむことは、歌人や連歌師にとって、まさにそのための営みであったと考えられる。万葉文化館には、宗祇抄、代匠記、万葉考などの注釈書も蔵されており（第三節参照）、今後の継続的な調査が必要である。本集には、宗祇抄についての景井の論考と、万葉考についての城崎の論考がある。

c．万葉集の書入本諸本

松阪市本居宣長記念館に、宣長の手択本万葉集が蔵されており、そこには宣長による多くの書入れがある。これによって宣長説を知ることができるわけであるが、この宣長説の書入れは、各地の国学者たちの書入れに継承されている。本居宣長記念館蔵本には、宣長の奥書が貼紙として付されている。

右、萬葉集二十巻、以　景山屈先生家蔵本校正之。至如冠註旁註亦皆據其本。已此本也　先生所自校正、蓋以契沖先師代匠記為據、如其称師云則今井似閑翁之説也。翁亦契沖之門人也。先生與似閑門人樋口老人宗武友善、是故　先生以其本校正訓點冠註旁註之、則實契沖傳説之義、不待代匠記而明焉者也。故〈予〉深崇信之以餘力寫之、蔵巾笥為秘珍矣。後之閲者勿忽諸爾

寶暦七年丁丑五月九日卒業于平安室坊寓居

神風伊勢意須比飯高蕣庵本居宣長謹（以上貼紙）

天明六年丙午十月十二日夜会読卒業（貼紙の横、裏表紙見返に直筆）

これと同じ貼紙の奥書が、万葉文化館蔵万葉集傍注にも、貼られている。関西大学図書館蔵寛永版本（C2/911.221/1～20）にも、本居宣長記念館本と同じ奥書が貼られており、さらに、天明六年の会読卒業の一行まで書き入れられ、本居宣長記念館本とそっくりの形態になっている。関西大学本は、巻一表紙見返に、

寛永二十年版部倶二十巻／于時／天和壬戌年／林祥日／枚井氏常政九拝（巻一末）

師ハ本居春庵宣長ノコト／岡ハ岡部氏加茂真淵ノコト／谷川氏ハ谷川上斉ノコト

万葉集書入二三冊ハ師ノヲシヘ書入アレトモ其度九州旅行是非ナシ依テ周令同門ノ兄稲掛大平カ本ヲ以助ケナランカト父政方六十歳ノ冬老眼悪筆ニテ全部書入畢ヌ帰国ノ後ヲコタルコトナカレ（巻一表紙見返）

とあり、「稲掛大平カ本」を写したものとみられる。万葉文化館本には、宣長奥書の貼紙に次いで、

右萬葉集者師〈本居宣長〉書入校正之本也／但〈予〉以稲掛大平之本寛政九年十月四日書入写畢　同十一年己未五月廿五日以殿村安守之本再書入校合／畢　神風伊勢飯野御民　堀口光重

の貼紙があり、ここにも「稲掛大平之本」の名がみえる。これらによって、宣長書入れの広がりがわかる。万葉文化館にはこの他、巻一のみの写本（版本の写し）や薄様本の万葉集にも、宣長その他、国学者たちの書入れがみとめられる。これらから、近世の国学者たちが、宣長の書入れを受け継いでいった営為の跡がうかがわれるのである。これらの書入れは、師説の継承とあらたな私按説とが入り混じっており、単に宣長説の継承だけではない。そこには、それをものした人の営為がある。近世の万葉集のよみ方のひとつとしてとらえるべきものである。またそれは、国学者たちの学問のひとつの方法でもある。さすれば、それがどのようにして形成されていったのかは、近世の学問のあり方という面からも興味深い。今後、国学者たちの書入れの集成が、一つのテーマとなりうるものと考える（参照、城崎陽子『近世国学と万葉集研究』（二〇〇九、おうふう））。

③については、主に、中世から近世にかけての万葉集の継承を取り上げた。

万葉集を写した人々、改編した人々、注釈した人々、それを継承していった人々、その他、万葉集に言及した人々など、多くの人々に支えられて、万葉集は受け継がれてきた。そこで本共同研究では、とくに近世の万葉集受容に焦点を当てて、万葉文化館の蔵書調査を行った。それとは別に、近世初期に堂上で受け継がれてきた万葉集のテキストである「禁裏御本」についての研究も一つのテーマとして取り上げた（参照、大石真由香「禁裏御本書入本の系統関係再考―近世初期の書写活動」（小川靖彦編『萬葉写本学入門　上代文学研究法セミナー』（二〇一六、笠間書院））。それは近世流布した版本やそれを写したと思われる嫁入り本との関係にもつながるからである。関西大学蔵紺地金泥表紙の平仮名傍訓本には、冒頭数枚に奇妙な錯簡がある。ところが、その錯簡は万葉文化館蔵宝永版本の冒頭奥書部分の版木のあり方から、錯簡の生じた原因が説明できるようになった。万葉集版本の版木のあり方が、奇妙な錯簡の原因を含んでいたのである。平仮名傍訓本と寛永版本との関係については、田中論文に詳しいこと、先述した。

近世初期に万葉集にかかわった人々として、拾穂抄の北村季吟、拾穂抄の原本を提供した藤原惺窩などが研究対象となった（大石真由香『近世初期『万葉集』の研究―北村季吟と藤原惺窩の受容と継承―』（二〇一七、和泉書院））。中院本の中院通村、あるいは近衛家の万葉集書写活動も、万葉集の伝本としてだけでなく、当時の文化環境の中で、万葉集との関わりを考える必要があろう。そんな中

に、嫁入本の制作工房の人々もまた、近世の万葉集に携わった者たちとして具体的な活動が明らかにされる必要がある。これも今後の課題である。

近世期にも、前時代から引き続き、平仮名書の本文の万葉集の類纂本がいくつか行われている。今回、調査しえたのは、万葉文化館蔵『万葉集抜穂』と関西大学蔵『春秋万葉集』とである。前者は、仮名で万葉集歌を抄出改編したもので、類題歌集の体裁をとる。全八十四丁。後者も同じく万葉集歌を仮名書類纂したものであり、歌いだしの五十音順に配列されており、全二〇六丁の大部なものである。その目的や意図、編者などは不明。今後の調査が必要である。この他、万葉文化館には、略解本抜書万葉集類句の写本、万葉二聖集、万葉集類葉抄、万葉集類句などの版本類が、近世期にものされた仮名書万葉の一類として蔵されており、近世期の万葉集享受のあり方を考えることも、今後のテーマとなろう（参照、景井詳雅「『萬葉集佳詞』続考―注釈の性格―」（和漢語文研究十三、二〇一五・三））。

三　二年間で調査した万葉文化館蔵本

一　平仮名傍訓本

①ロ42万葉集（嫁入本）　紺地金泥表紙、全二十巻。

近世以降、紺地金泥表紙の調度本として、数多く制作されたもののひとつである。紺地金泥表紙の調度本は、万葉文化館蔵本をはじめ、関西大学（二本のうちの一本、もう一本は綾地表紙）、国文学研究資料館、獨協大学などに蔵され、その他、名古屋市蓬左文庫（綾地表紙）、新潟大学（表紙の形態不明）などに平仮名傍訓本の所在が確認されている。本集田中大士論文参照。

二　万葉集の書入本

②ロ1　万葉集（薄葉本）　一冊二巻綴　1～6（2欠）の五冊（巻十二まで）

巻一～十一に朱・墨の書入れ（主に万葉考説、中に宣長云あり）

③ロ2　万葉集（袖珍本）　万葉集校異の写本　欄外は校異本の頭書

リストにある「藤原以文　文化二年写」はあやまり。校異本の奥書。

版本の写しだが、大きさが袖珍本の万葉集は珍しい。全六冊仕立て。

④ロ3　萬葉和歌集校異　文化二年刊　出雲寺文治郎　巻五欠　全十九巻

朱書入　巻七　二十八丁くらいまで

真淵翁、宣長翁、略解など／伊則イフ＝独自説（書入者か）

⑤ロ4　万葉集傍注　寛政元年刊　出雲寺泉掾　出雲寺文治郎　全

二十巻

表紙貼紙「凹邨文庫／第百三拾三号／全部貳拾冊」（巻一）

蔵書印「萬津迦計」（陰刻）、「光重之印」（陽刻）

全体に書入・貼紙・紙片挿込多数

師按、師本、岡説、岡部翁、考、谷川氏、道丸、道万呂、久老、千蔭、長流、大平、海量、龍丸、綾足、安田正起、西山正年、宮地春樹、谷真潮、内山真龍、光重按ほか

巻二十　成俊奥書の丁に、内山真龍の書付、

万葉集之今ノ本　傳り候ハ延元年中／吉野ノ御子宗良親王信濃ノ姨捨山／にかくれおはしまし、時権少僧都成俊ニ／あたへ給ふ万葉集也此事ハ万葉集奥書／文和年中僧都か文と宗良親王／の歌集と引合候へハよく相知レ申候此／親王ハ遠江国引佐野ニ忍ハセ給ひて／遠江ニ陵有仙覚之訓之外ハ親王／と僧都之訓と存られ候／内山真龍

さらに、宣長手択本奥書の貼紙にならんで、次の堀口光重書付貼紙がある。

右萬葉集者師〈本居宣長〉書入校正之本也但予以稲掛大平之本／寛政九年十月四日書入写畢　同十一年己未五月廿五日／以殿村安守之本再書入校合畢／神風伊勢飯野御民　堀口光重

内山真龍（一七四〇～一八二一）は遠州の国学者、賀茂真淵、渡辺蒙庵、田中道麿門人。高松亮太「賀茂真淵と内山真龍―『内山真龍翁関係手帖横巻』を中心に―」（鯉城往来二〇、二〇一七・十二）参照。

堀口光重は伊勢の国学者、宣長門人。本居宣長記念館蔵宣長四十四歳像の箱書（内箱）に、「本居中衛平宣長大人肖像自画自讃／松蔭堀口光重珍蔵／印『堀口六兵衛』（陽刻）印『光重』（陰刻）」。裏「いまの鈴乃屋春庭うしより此像を譲りたまひければいとも〳〵うれしくありがたくてひめおく箱にかきつく／わかれしは雲ゐはるかに入る月のひかりをこゝうつしとめける／源（花押）印（陽刻）」とある。

蔵書票の「凹邨文庫」については、本居宣長記念館ホームページ「宣長さがし　宣長と小津安二郎をつなぐもの」に、次のような記事がある。

つまり小津は爛熟の東京ではなく、終焉とはいえ、まだ豊かで静かな空気が漂う町で多感な少年期を過ごすことが出来た。本家の土手新には西荘文庫として珍籍稀書や三〇〇点余りの円山応挙作品があり、叔母の嫁ぎ先の長井家の主人は謡曲に入れあげていて、最も親しかった友人、乾の家には凹邨文庫という図書の山があったのです。

「凹邨文庫」の蔵書票をもつ本は、各地の図書館に蔵されており、国会図書館蔵『年中行事秘抄』、東京国立博物館蔵『陶説』、岩瀬文庫蔵『風浪後集』、京都大学 吉田南総合図書館研究室『外題鑑』、京都大学附属図書館・谷村文庫蔵『鳩巣書翰』『山響冊子』などが

知られる。万葉文化館には、もう一本、『万葉集玉の小琴』にも「凹邨文庫」の蔵書票がある。

なお、堀口光重の「萬津迦計」「光重之印」の蔵書印について、同じものが蓬左文庫蔵『田安亜槐御歌』に押されていることが、高松亮太「実朝・宗武をめぐる秋成の活動と上方和学」（近世文芸九六、二〇一二・七）に紹介されている。

⑥ロ12　萬葉和歌集（宝永版）

（刊記）皆寶永六〈丑〉季春吉辰／御書物屋　出雲寺和泉掾

（奥書）

以上二十巻諸説書入終

文化五辰年長月三日　五味長麻呂（花押）

朱・墨の書入（墨書入のうちに「恵岳」など）

題箋の巻数の左に朱で万葉考の巻次

⑦ロ15　萬葉和歌集（宝永版）

宝永版　巻十五・十六あたりまで　朱・墨の書入あり　虫食いのため精査不能

⑧ロ36　萬葉和歌集（宝永版）

（刊記）皆寶永六〈丑〉季春吉辰／御書物屋　出雲寺和泉掾

（奥書）

五束邑

主　大宮高橋氏　㊞［墨印「義」］

題箋の巻数の左に朱で万葉考の巻次

（巻二十尾題下）

○伊勢国荒木田神主久老本奥書

古本奥書云永和元年十一月廿五日桑門由阿〈在判〉

右以門生豊前国人藤原堅石所校本再校畢

○以久老校本校合

天明六年丙午七月七日校合畢信野国水内郡永井幸直

○以幸直校本再校

天明七年〈丁未〉春二月朔同国高井郡墨坂春岑校合

○以春嶺翁校本再校

寛政八年〈丙辰〉臘月廿八日同国水内郡五束高橋義暉

（蔵書印）

「茂吉蔵書」「蕉雨園蔵書」

高橋義暉は、信濃国の国学者。東京大学文学部図書館蔵『韻鏡造悃抄』の奥書に「寛政六甲寅歳五月中旬　大宮神主高橋義暉写　于時五十六歳」とあり、巻末に「持主 伊豆加 大宮（印）」と墨書がある。蔵書印にある「蕉雨園」は、明治の政治家、宮内大臣を務めた田中光顕の邸宅。その蔵書が、斎藤茂吉に移ったものである。

⑨ロ32　万葉集巻第一

版本の本文のみを写し、朱で注を加えたもの

巻一、二十九丁ウまで（末二丁欠）

書入れとして、鈴、本居氏、師説、縣居、考、岡、谷川氏、正明、道麿、建正、荷田御風、山路介寿、久葛（藤本）、千蔭、諸平按（貼紙）、玉勝間、逍遥院口伝などの名がみえる。

三　注釈等の仮名書歌

⑩ロ72　万葉集抄

二丁～　巻四　版本の写し　緒にて訓の異同、勘物　墨にて行間に注（岡部云など）　墨にて頭書注（冲今按など）

三十六丁～　古今相聞往来歌　仮名書歌

八十二丁～　雑録　万葉考序、旋頭歌（漢字本文のみ）　正述心緒（漢字本文のみ）など

⑪ロ91　万葉集注抄（全三冊）

第一冊　一～　宗祇抄（仮名書歌）　十八～　万葉注釈〈目安〉

第二冊　第三冊　万葉集の注釈（巻一　二十七番まで）

⑫ロ79　万葉集長歌載短歌字由事

群書類従十六下に定家長歌短歌之説としておさめられている。引用歌は平仮名書。

その他、今後、さらなる調査が必要なもの

⑬ロ7　万葉集抜穂　写一冊　仮名書本万葉集

⑭ロ10　萬葉二聖集　刊二巻二冊　文政二年　河内屋儀助他刊　篁園文庫（竹内篁園）旧蔵

⑮ロ11　萬葉緯　写六冊

⑯ロ19　万葉集佳調　写二巻一冊　寛政六年　長瀬真幸・文化十三年　真見いくし　奥書

⑰ロ25　万葉集玉の小琴　写一冊　凹邨文庫本

⑱ロ28　萬葉代匠記　巻五抄　写二冊（上巻は巻六の抄出、下巻は巻五の抄出の下巻）

⑲ロ37　万葉考　写二十巻十六冊

以上のほかにも、ロ35　寛永版本萬葉集をはじめ調査が及ばなかったものが相当ある。すべて今後の課題となる。

四　まとめ

万葉集の研究史のとらえ方は、人によって異なるだろう。それを承知で略述すると、源順の古点、仙覚の校本と注釈（新点）を起点として、契沖の代匠記、近代の校本万葉集と万葉集総索引、諸注集成としての万葉集叢書（工具の整備）と澤瀉久孝『万葉集注釈』（訓詁注釈の方法）が画期としてあげられる。それらを核として、万葉集の本文制定、万葉集歌と万葉集自体の理解をめざしてきた。あるいはそのための研究方法が、模索されてきた。日本文学の中で校本と索引が整った最初が万葉集であり、われわれはその恩恵に浴しな

がら万葉集研究にたずさわってきたことになる。しかし、工具類の整備は、そこから研究がはじまるという点において、それ以前の出来事を抽象化してしまう面もあるのはいなめない。そこに取り残されたものは、研究の対象とはならないといった感覚をうむのも事実である。ここにとりあげた平仮名傍訓本はまさにその取り残された存在であったといえよう。したがって、これの研究が、万葉集歌や万葉集そのものの理解に資するところがあるかと問われれば、否定的な面もある。また、校本万葉集にとられた古今六帖や五代集歌枕など平安鎌倉時代の類聚歌集中の万葉歌も、それが本文制定や訓詁注釈に利用されることはあっても、それら自体を万葉集歌の享受資料として正面から向き合われることは少なかった。さらにその量の膨大さもあるが、宣長の書入れがそれ自体の問題として取り上げられるようになったのはごく最近のことである（城崎陽子「本居宣長記念館蔵本居宣長手沢本『万葉集』における書込」（二〇一四年度万葉学会全国大会発表、二〇一四・十・十二、於天理大学）。まして その書入れの末流が万葉集研究の中に位置づけられることはなかっただろう。

しかし、万葉集が日本文学史の中のひとつの作品とするならば、それ自体の研究とともに、文学史の中での研究も当然あってしかるべきであり、和歌文学研究では常識的な享受史研究が万葉集研究の場合、遅れていた観はいなめない。冒頭に述べたように、冷泉家時雨亭文庫の公開や廣瀬本万葉集の発見によって、徐々にそのあたりの研究がふえつつあるが、まだまだごく少数に過ぎないというのが実感としてある。

ここに示したような研究テーマがはたして万葉集研究の中に根付いていくかどうかはわからないが、万葉集が長い歴史の中でどのような人々によってうけつがれてきたのか、それぞれの人々がどのような万葉集をよんできたのか、あるいはみてきたのか、そういった興味は尽きない。

最後になったが、このような隙間産業的な（といっては共同研究者諸氏には失礼だが）研究を採択いただいた万葉文化館関係者の方々にお礼申し上げる。願わくは、このような研究がさらに継続できることを祈りつつ。